

北海道ポーランド文化協会 第73回例会



# Concert



～ピアノで奏でるポーランド～



2015年6月30日(火)  
 開場 18:30 開演 19:00  
 時計台ホール (中央区北1西2)  
 TEL (011) 231-2838  
 入場料: 1,000円



お話/薄井豊美

ピアノ演奏/安藤むつみ, 高島真知子, 名取百合子, 横路朋子

プログラム/ボンダジェフスカ: 乙女の祈り, パデレフスキ: メヌエット

モシュコフスキ: 愛のワルツ, ポーランド舞曲 Op.55 より

ショパン: ワルツ第7番 Op.64-2, ポロネーズ第3番「軍隊」, ノクターン Op.9-2,  
 幻想即興曲 Op.66, バラード第4番 Op.52, 四手のための変奏曲二長調



ポーランド広報文化センター  
INSTYTUT POLSKI TOKIO

協賛: ポーランド広報文化センター 後援: 札幌市・札幌市教育委員会

♪ 「乙女の祈り」関連記事(7ページ)もご参照ください。

※ 詳しくは同封のフライヤーをご覧ください。

dawny sklep rybny  
drzewo wiśni zakwitło  
również w tym roku

魚屋の  
終うも知らぬ  
桜かな

津田 モニカ (ポズナン)

近所の角に、かつて魚屋だった建物が残っています。先日、ある老婦人が寄ってきて、この魚屋のことを尋ねました。私は、店が閉じてしまったことを教えなければなりません。悲しそうにしていました。私の方は、団地の真ん中に大きなスーパーマーケットが出来て、便利になったにもかかわらず、小さな魚屋がなくなったことを残念がっている人がまだいるのを見て、心強くなりました。

wiosenny księżyc  
pod cieniami ukryty  
odgłosy ptaków

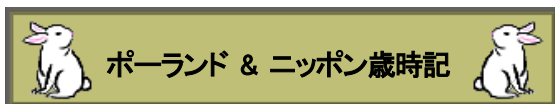
鳥の声  
影で隠した  
春月夜

ピョトル・ヴジェチョノ

Piotr Wrzeciono 情報科学研究者。ワルシャワ勤務。学生時代から日本文化に興味を持ち、2003年から俳句を詠む。「一瞬を眺める」がモットー。

新春の今・ポーランド如何ならん  
津田君の雪の読書はチェーホフか  
花ごぶし空に希望のある如し

霜田 千代磨 (岩見沢)



ポーランド & ニッポン歳時記

《第73回例会報告》

## 時計台コンサートを聴いて

高橋健一郎

6月30日、小雨の降るあいにくの天気ではあったが、久しぶりの北海道ポーランド文化協会のコンサート「ピアノで奏でるポーランド」(時計台ホール)に出かけた。

ショパンの名曲と並んで、バダジェフスカやモシュコフスキ、パデレフスキといった、ショパンの陰で忘れられがちなポーランドの作曲家たちの作品を散りばめたプログラムは、ほかではなかなか聞くことの出来ない、この協会ならではのものだろう。しかも、単にいろいろな曲が並んでいるだけではない。聴き手がポーランド音楽の様々な側面を十分に堪能できるように配慮されたユニークな構成だった。

コンサートは薄井豊美さんの軽妙で楽しい解説に導かれながら、バダジェフスカの《乙女の祈り》で幕開けした(演奏は安藤むつみ[敬称略、以下同じ])。作曲技法的にはごく単純な曲でありながら、やはり長い歴史の試練を経た人気曲には独特の力がある。聴衆は一気にポーランド音楽の世界に引き込まれていった。

そのあとはパデレフスキの《メヌエット》、ショパンの《ワルツ第7番》とモシュコフスキの《愛のワルツ》(以上、高島真知子)、ショパンの《軍隊ポロネーズ》(安藤)と、舞曲が続けて4曲演奏され、前半最後はこれまた舞曲であるモシュコフスキのピアノ連弾曲《ポーランド舞曲》(マズルカ2曲、ポロネーズ、クラコヴィヤク)で締めくくられた(高島、名取百合子)。舞曲はどの民族の音楽においても、最も基本的なものの一つだけれど、ポーランドはとりわけ舞曲が発達しているのではないだろうか。軽やかなワルツ、勇壮なポロネーズ、繊細に気分がうつろうマズルカ、軽快なクラコヴィヤク……この日奏でられた曲も、眼前にまるで民族衣装を着たポーランド人が踊る情景が浮かんでくるようで、民族の根っこの部分としっかり結びついた音楽であることが分かる。そして、

何よりその軽快なリズムに乗って、爽やかで、軽やかで、でも時に哀愁を帯びた歌が流れるところがいかにもポーランドらしい。

こうして、聴き手はポーランドの舞曲を聞きながら、いつしかポーランドの土の香り漂う世界にとっぷりと入り込んでいった。

後半はショパンの作品が並ぶ。ショパンの音楽はやはり格別である。コンサート前半でたつぷりと味わったような土着の踊りの音楽を根に持ちながらも、それを超えた個性を強烈に放つのがショパンである。

うっとりするような歌がひたすら流れる《ノクターン 作品9-2》から始まり、歌謡性に幻想性が加わった《幻想即興曲》と続く(名取)。そして歌謡性と幻想性にさらにドラマ性、哲学性、物語性などが組み込まれた壮大で深遠な世界を、高度なピアノ書法で紡ぎ出す《バラード第4番》(横路朋子)。ショパンのピアノ曲のもつ様々な魅力が3人の演奏者の熱演によって存分に描き出されていく。

最後は、ショパン《四手のための変奏曲》(名取、横路)。円熟の極みの大傑作《バラード第4番》とは打って変わって、若書きの楽しい変奏曲である。それまでショパンの奥深い精神性に触れながら、神経を研ぎ澄ませて耳を傾けていた聴衆を、最後に軽やかに現実世界に引き戻すかのように、とても楽しげに演奏されて、プログラムが締めくくられた。

こうして1時間半ほどの短い時間の中で、バダジェフスカに始まり、ポーランドの様々な舞曲、そしてショパンの作品を通過しながら、ポーランド音楽の魅力が存分に伝えられた。会場を埋め尽くした人々も(小さい会場ながら、これほど人が入ることは本当に珍しい)[150人入場]皆その魅力を堪能したに違いない。

素敵で一夜を与えてくださった演奏者の方々、企画し、運営してくださった方々に心より感謝申し上げます。  
(たかはし けんいちろう)



写真(左)最後に「森へ行きましょう」を大合唱(左から薄井、高島、横路、名取さん)  
(右)札幌在住のポーランドの皆さんと安藤さん